



Title	マプーチェ歴史伝承、ラウタロ区(1) : フアン・コネ ヘー口の語る「征服」と「平定」
Author(s)	千葉, 泉
Citation	Estudios Hispánicos. 1998, 22, p. 95-112
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93832
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

マプーチェ歴史伝承、ラウタロ区（１） —フアン・コネヘーロの語る「征服」と「平定」—

千 葉 泉

Testimonio histórico mapuche, comuna de Lautaro (1):
“Conquista” y “Pacificación” contado por don Juan
Conejero

Izumi Chiba

< 1 > 序

本稿は、チリ南部第 9 地域のラウタロ区に位置する共同体に居住する先住民マプーチェの男性フアン・コネヘーロ・カリラフが、筆者にマプーチェ語で語った証言を対訳形式で呈示したものである。

筆者は1996年7月初旬から9月上旬にかけて、チリ南部の第9アラウカニア地域に滞在した。その時の滞在の最終日に、マプーチェの伝統遊戯「パリン」¹のトーナメント試合を観覧する機会があった。試合の場所は、テムコ市街から南に10キロほど行ったラブランサの地にあるバハイ教団²の敷地である。数日前、医療関係の調査でルマコ区に滞在した時に同地区のパリン・チームのメンバーと知り合いになったので、彼らを応援するために出かけたのである。

当日試合場に到着すると、筆者の何名かの友人が住むラウタロ区のチームも参加していることを知った。そこで、ラウタロ・チームの応援もしようと思えば応援席に行ってみると、そこには既に数名のマプーチェ男性が陣取っていた。すぐにマプーチェ語で彼らにあいさつをすると、その中に驚きと喜びの混じった顔で私にいろいろ質問してくる年輩の男性がいた。それがラウタロ区のホセ・アンヘル・レポイケ共同体に住むフアン・コネヘーロ・カリラフである。

どこから来たのか、職業は何か、日本にもマプーチェがいるのか…、こうした矢継ぎ早の質問に曲がりなりにもマプーチェ語で答えていると、突然彼はある歴史伝承を私に語り始めた。それは、スペイン人によるチリ征

服以来のマプーチェ民族の歴史に関するもので、興味深く思われた。

そこで私はフアンに、その伝承を録音したいのもう一度最初から語ってくれないかと頼んでみた。快く承諾した彼は、時には冷静で穏やかな口調で、そして時には怒りと興奮の混じり合った快活な口調で話してくれた。

ファンの証言を構成する主な内容は二つある。一つは、16世紀の「征服」から19世紀後半の「平定」に至るまでの時期に、外部から到来した異民族に対してマプーチェが展開した抵抗に関して地元のラウタロ区で語り継がれてきた伝承である。そしてもう一つは、非先住民系チリ人によって書かれてきた「マプーチェの歴史」に対する批判である。

証言の対訳を呈示する前に、この二つの内容のそれぞれについて興味深い点を指摘しておこう。

まず歴史伝承に関する部分について見てみよう。

マプーチェの間では昔から歴史伝承の習慣があり、「ウェウピフェ weupife」という語り部がほんの20～30年前までは各地に存在していた。これらの語り部によってマプーチェ語で語り継がれてきた地区レベルの伝承は、彼らがスペイン人の到来以降の歴史をどう認識してきたのかという点に関するヒントを与えてくれる。

そしてファンの証言にも、この意味で興味深い特徴がいくつか見いだせる。

まず第1に、「スペイン人による征服」と「チリ共和国軍による平定」とが同一視されていること、あるいは連続的な形で認識されていることが挙げられる。

マプーチェと言えば、16世紀中葉にチリに到来したスペイン人の征服の試みに対して長期にわたって抵抗した民族として知られている。しかし、近年チリ内外の歴史家たちの研究によって植民地時代のチリのフロンティアに関する研究が進み、実際にマプーチェがスペイン人植民者当局に激しく敵対していたのは、16世紀中葉の征服期から植民初期の17世紀前半頃までであったという考え方が支配的となっている。つまり、17世紀後半から19世紀初頭の植民地時代末までの時期には、戦闘行為よりも、むしろ公式・非公式両側面における政治・軍事上の交流、通商、布教活動を初めとする平和的な関係が両社会の間で進展していったという視点である。

ところで、マプーチェの大半の集団が最終的に支配社会に統合されたのは、19世紀後半にチリ共和国軍が実行した「平定」によってであった。こ

れはチリがスペインから独立した後のことで、その意味で、彼らに対する実質的な支配を確立したのは「チリ人 *chilenos*」であった。

そして、「平定」期に関する研究においても、交易や布教活動などの様々なレベルにおける両社会の交流に主要な関心が置かれるようになった。中には、現在のチリ歴史学界を代表する歴史家の一人であるビジャロボスのように、当時すでにマプーチェ社会が外部社会にかなり「統合」されていたため、「平定」は半ば「平和裡」に行われ、軍事衝突は最小限であったと主張する歴史家もいる [Villalobos: 60-62]。

それに対し、フアンは意図的に「平定」を実行したものたちを「スペイン人たち *pu español*」と表現し、「マプーチェは350年以上も戦った」と述べている。「平定」時の戦闘を16世紀の「征服」時から持続する「異民族支配に対する抵抗」と位置付けているのである。つまり、近年歴史学の分野で興隆しつつある「平和的なフロンティア諸関係」を強調する潮流とはかなり異なる認識に立っているといえる。

そして第2に、この点にも関連して興味深いのは、マプーチェが反乱を開始してから350年目に開催されたとする「和平交渉」に言及する際に、それまでのマプーチェの抵抗闘争を指導した人物として、カウポリカンやガルバリーノ、そしてラウタロと並列する、あるいは連続する形でマリルアンとマギンが位置付けられていることである。

この点を、いわゆる「史実」に照らし合わせて比較すると一つの特徴が浮かび上がる。

まず、カウポリカン、ガルバリーノ、ラウタロは、スペイン人の詩人エルシージャが書いた不朽の叙事詩「ラ・アラウカーナ」にも登場する人物で、いずれも16世紀の中葉という初期の時代の反征服者闘争の過程で活躍した英雄である。

それに対し、フアンが真っ先に挙げているマリルアンとマギンは、19世紀初頭のチリ独立戦争の時に活躍した人物である。

ところでチリでスペインからの独立戦争が勃発した時、大半のマプーチェの地区集団は王党派を支援し、地元のクリオーリョたちが指揮する独立派の軍隊と数年間にわたって激しい戦闘を繰り広げた。マプーチェがスペイン人植民者に対峙する態度は、長期にわたる両社会の接触の中で、確かに大きく変容していたのである。そして、王党派を最も強力に支持したマプーチェ集団の代表的な指導者がマリルアンとマギンであった。³

つまりこの両名は、「植民地支配からの脱却」という、一見マプーチェと共通の目的を追求していたように見える独立派には確かに対立したといえるが、「植民地支配の維持」を図るスペイン王室、あるいは植民地当局に対しては、むしろこれに積極的に加担した人物であったのである。

この点から見ると、フアンの証言では、いわゆる「史実」が「誤解」、あるいは「歪曲」された形で認識されているように見える。

しかし1641年に開催された最初の大規模な和平である「キジンの和平」以降、スペイン王室はビオビオ川を両社会の境界と定めてマプーチェの征服を事実上放棄し、マプーチェの自律的存在を基本的に認めていた。こうした状況のもとでは、スペイン王室は共存が可能ないわば「既知のよそ者」であり、彼らを「敵」と見なすことの積極的な意味そのものが消失していたといえる。

それに対し、いわば「未知のよそ者」である独立派のクリオーリョ軍こそ、得体の知れぬ、自分たちの自律的存在を脅かす可能性を秘めた存在であると同時代のマプーチェたちが見なしていたとも考えられる。つまり、「スペイン王室を支援すること」自体が、少なくとも「消極的な意味」においては自らの自律性を維持しようとする行為であった、という認識の可能性である。

もしそうだとすれば、フアンが、王党派に加担したマリルアンやマギンを、征服期に活躍したカウポリカンやラウタロと同様に自民族のために戦った英雄的指導者として位置付けていることは、単なる記憶の不明化による「時代錯誤」、あるいは「誤解」として片づけることは出来なくなる。

そして少なくともマギンは、独立後の19世紀前半から中葉にかけて、国家支配領域の拡張を画策するチリ政府によるマプーチェ居住地域統合の意図を早くから見抜いて強い不信感を抱き、最も強硬に敵対し続けたリーダーでもあった。なお、マギンが居住していたアデンクルは、フアンが住むラウタロ地区の近郊の地である。

16世紀のスペイン人征服者であれ、19世紀初頭の独立派軍であれ、独立後のチリ共和国軍であれ、何らかの意味で自民族の自律的存在を脅かす「よそ者」を同じ「侵略者スペイン人」として同一視する。こうした論理は、「敗者」である先住民マプーチェ独自の認識を反映しているものと思われる。

そして、証言の中で興味深い第3の点は、350年目にコジプージで開催されたという和平交渉に関する指摘である。これはおそらく、チリ共和国軍が平定を進めるための第一歩として、17世紀以来両社会の境界線であったビオビオ川の南に位置するマジェーコ川まで境界を南下させた時に、地区のマプーチェたちとの間で開催された和平の一つを指しているものと思われる。コジプージは、マジェーコ川の北岸に位置する地の名称である。

つまりフアンの証言では、マプーチェたちは16世紀の征服期以来ずっと「よそ者」による征服の意図に対して戦い続け、19世紀の後半に初めて「和平」交渉が実現したという認識になっているのである。前述したように、実際にはすでに1641年の段階で最初の大規模な和平である「キジンの和平」が開かれている。

その意味では、この指摘も「史実に反する」といえるかも知れない。

しかし、今からわずか100年余前に実行された「平定」の際、チリ共和国軍は当初マジェーコ川を新しい境界に定めると提案したにもかかわらず、実際にはその後まもなく同川以南の地域に対して本格的な戦闘を展開し、マプーチェがそれまで維持してきた自律的な領域は完全に占領された。⁴マプーチェたちにとっては「裏切り」と見えるこの「平定」に対する未だ生々しい憤りの感情が、350年目の「和平」とその「破棄」の重要性を強調させているのだろう。

その意味で、この説明にも地区のマプーチェたちによる「平定」認識の特徴が反映されているといえる。

次に、フアンの証言を構成する二つ目の内容について見てみよう。それは、今日のチリ人の歴史教師や歴史家、あるいは彼らが著した「マプーチェの歴史」の類に対する不信感である。

「野蛮なインディオ」に「文明をもたらしたヨーロッパ人」といった西欧文明中心主義的な視点は、16世紀の征服当時のみならず、現在でも非先住民系チリ人の意識の中に根強く残っているようだ。フアンの証言でも、こうした視点に立つ国史の教師の存在が指摘されている。

今日、マプーチェの歴史を研究するチリ人研究者の圧倒的多数は、非先住民がスペイン語を初めとする西欧語で書き残した記録を主要な参考資料として著述を行っている。

だが、筆者はこうした歴史研究者たちに対する批判を、異なる地区に居住する複数のマプーチェの口から耳にした。「よそ者」であるスペイン人や

チリ人がスペイン語で書いた資料から、一体自分たちマプーチェの歴史の何がわかるのか、われわれの本来の言語であるマプーチェ語が理解できないのに、なぜマプーチェの文化が語れるのか…。

こうしたマプーチェたちの批判は、一見あまりにも短絡的に見えるかもしれない。マプーチェの場合、メキシコやペルーの先住民と異なり、植民地時代から19世紀に至る時期に、先住民の体系的な証言を先住民語やスペイン語で記録した資料はほとんど皆無である。したがって、16世紀の征服期から少なくとも19世紀後半の「平定」期に至るまでのマプーチェの歴史を研究しようとする際、文字に書かれた資料として利用できるのは、確かにその圧倒的多数が非先住民の著者がスペイン語をはじめとする西欧語で書き残した記録である。⁵

それに対し、文字を持たぬ民族であったマプーチェの間で保持されてきたマプーチェ語による歴史伝承は、記録に書かれたものではない。したがって、口頭で語り継がれていくうちに原伝承に含まれる個々の情報の欠落や単純化、他の情報との混交など、様々な内容上の変容を被る場合も少なくあるまい。フアンの証言の中でこうした側面を示唆する点についてはすでに見た。つまり、個々の出来事に関する（マプーチェ側の）「正確な情報」を得るという目的にとって、こうした伝承が必ずしも信頼に足るものではないとはいえる。

だが、「よそ者」であるスペイン人や「勝者」である非先住民系チリ人がスペイン語で書き残した記録に含まれる情報も「絶対的な真実」というわけではない。書かれたものである以上、それらの記録には同時代の出来事を、少なくともスペイン人、チリ人にとって「正確」に伝える情報も見い出せるだろう。だが同時に、彼らの価値観によって意識的、無意識的に事実を歪曲する形で筆記された情報も多く含まれているからである。

「正確な情報」の模索、あるいは「絶対的な真実」の追求を問題にするのではなく、あくまで「被征服者」あるいは「被平定者」である当時のマプーチェが「征服」や「平定」をどう認識したのか、あるいは少なくとも、自分たちの民族の運命を大きく変えたこれらの歴史的事件を現代のマプーチェがどう認識しているのかということを考える際に、こうした伝承は重要な資料となりうる。そして、「敗者」であるマプーチェの認識を反映するこれらの伝承を呈示することは、「勝者」が西欧語で書き残した記録のみに基づいて構築される「マプーチェの歴史」、あるいは「チリの歴史」を何ら

かの意味で検討する契機を提供してくれるだろう。

そして、少なくとも19世紀の後半に起こった「平定」については、すでに当事者自身の証言を得ることはほぼ不可能にせよ、当事者であった父母、あるいは祖父母などから、自地区における「平定」の実態に関する先住民側の直接的な証言を語り継いでいる人々は未だに多く生存している。

こうした歴史伝承の習慣は、マプーチェの多くが居住する農村共同体地域において急速に進展しつつある近代化や彼らの「スペイン語モノリンガル化」のプロセスとともに各地で消滅しつつある。したがって、今のうちにこれらの地区レベルでの伝承を原語の形で一つ一つ記録しておくことは、マプーチェ社会の運命を大きく変えた「平定」に関するマプーチェ側の生々しい記憶を後生に伝えるという意味でも歴史的な意義を有する営為であろう。

自民族の歴史に関する自分たち自身の主張を、それが忘却されてしまう前に何とかして外部に伝えたい、あるいは後生に残したい、そんな焦燥感をフアンも感じていたのだろう。証言を語り終えた彼は、筆者が彼に感謝する間を与えず、「ありがとう、あんたに感謝したい」、そして「このことを話して欲しい」と告げている。

むろん、決してファンの証言がマプーチェ全体の統一的な歴史認識というわけではない。中央集権的な構造に欠けるマプーチェ社会は、征服期以来、外部者の圧力に対して地区ごとに様々な形で対応してきた。したがって、「征服」や「平定」などの事件に対して、それぞれの地区ごとに異なる伝承が残されていて不思議はない。また、同じ地区内でも家族ごとに、あるいは個々人のレベルで多様な伝承が残されていることもありうる。現に、例えば同じラウタロ区の別の共同体に住むある男性は、征服と平定に関してファンのそれとは異なる内容を含む伝承を筆者に語っている。

その意味で、こうした地区ごとの伝承を一つ一つ拾い上げて行くことによって、初めてマプーチェ民族による歴史認識の輪郭が少しずつ見えてくるのだろう。本稿はそうした試みの第1歩に過ぎない。

最後に、ファンの証言に観察される言語上の特徴について説明しておこう。原語で記録したとはいっても、実際には以下の原文に観察されるように、語根、単語、フレーズなど、さまざまなレベルでスペイン語の表現が混入している。したがって、今日かなり「純粋なマプーチェ語」を保持する人々の間で話されている「マプーチェ語」の発言に観察されるスペイン

語の影響を検討するための資料としても以下の証言は参考になるだろう。

そしてこの目的で、原文のうちスペイン語で表現されている部分と、邦語訳のうちスペイン語の表現に対応する部分には下線を付した。またスペイン語の部分は、原証言の表現や発音を尊重する形で筆記した。

ホセ・コネヘーロ・カリラフ氏には、この知識を筆者に与えてくれたことに対して感謝したい。そして、チョルチョル出身のイラリオ・ウイリレフ・バーラ氏にも、いくつかのマプーチェ語表現の解明に協力してくれたことに対して感謝する。

Chaeltun piafiñ ta ñi wenüi Juan Conejero Carilaf ta ñi eluel ta tüfachi kimün. Ka mañumafiñ ta ñi wenüi Hilario Huirilef Barra, tuulu Cholchol meu, ta ñi kellun mu kiñeke trokiñ dungun meu.

Le agradezco a don Juan Conejero Carilaf por haberme dejado este conocimiento. Y también le agradezco a don Hilario Huirilef Barra, oriundo de Cholchol, por haberme ayudado para aclarar algunas frases en idioma mapuche.

< 2 > ファン・コネヘーロの語る「征服」と「平定」

[Autor] Aquí entonces estamos en la cancha de Radio Bahái, y estamos conversando con kiñe peñi⁶, tuulu ta Lautaro püle, cierto?

[Juan] Felei.

[Autor] Eimi nentuaime ta mi üi.

[Juan] Sí. Bueno. Iñche, peñi, nien ta apellío winka, pero mapuche ta iñche, Juan Conejero pingei ta ñi üi. Juan Conejero Carilaf.

[Autor] Ka tunten tripantu nieimi?

[Juan] Nien ta kayu mari kechu tripantu. Kayu mari kechu tripantu nien, fei llegün ta ñi, kiñe comunidad de José Angel Lepoique pingei ta ñi comunidad, feichi comunidad meu ta llegün.

(筆者) ええと、ここバハイ・ラジオ局のグランドで、ラウタロ方面からやってきた兄弟⁶の一人とお話をしています、そうですね。

(フアン) そうじゃ。

(著者) あなたのお名前を言ってもらえますか。

(フアン) ああ。よかろう。わしはな、兄弟よ、ウィンカ⁷の姓をしてはいるがマプーチェなのだ。名はフアン・コネヘーロという。フアン・コネヘーロ・カリラフじゃ。

(筆者) で、おいくつですか。

(フアン) わしは、65歳じゃ。65歳でな、わしは自分の、ある、わしの共同体はホセ・アンヘル・レポイケ共同体というのだが、その共同体で生まれたのだ。

[Juan] Bueno, peñi. Eimi am fau mu inchelu, ta mi pichin kimal chumngechi ta ñi akun ta tüfachi pu español ta tüfachi mapu meu.

Bueno, yo ramtuafeyu, peñi, no sé, re mapuche nütramkayan am kam

[Autor] Re mapuche meu ta nentulmi ta mi dungun ta kümeafui. Felei, no?

[Juan] Ya. Felei. Entonces, re mapuche entuleafñ.

[Autor] Ya.

(フアン) それで、兄弟よ。いまわしと一緒にいるあんたは、そのスペイン人たちがどのようにしてこの地にやってきたかについて少々知りたいというわけじゃな。

それでじゃ、わしはあんたに聞いておきたいのだが、兄弟よ、どうなんじゃろ、マプーチェ語だけで話をしたらいいか、それとも…

(著者) マプーチェ語だけで話して下さったらありがたいのですが。いいでしょう、ね。

(フアン) そうか。よかろう。では、マプーチェ語だけで話すとしよう。

(筆者) お願いします。

[Juan] Fei iñche am tüfa nielu kayu mari kechu tripantu, fei tüfa niei ñi konpan kai tüfachi pu ka tripa che, tüfeichi pu españole ya amuyetui doi kechu pataka tripantu. Doi kechu pataka tripantungei ñi konpan engün ka.

Entonces fei petu, petu ñi konpanuan tüfachi pu españole, fei ta mapuche

fei kisu ñi ayükawün ta felekefui, femechi ta kimpan ta iñche.

Fei siempre ngütram yenien, ngütramyeken tüfachi dungu, fei kiñeke mu fei ta lldküñgefui reke fei ta, chumngechi ta iñ, fente ta iñ kutrankangepan.

(ファン) それで、わしは今65歳になるが、このよそ者たち、そのスペイン人たちがこの地に入り込んでから、今ではもう500年になる。500年以上も前に彼らはこの地に入ってきて来たんじゃ。

それで、まだ、まだこのスペイン人たちが入ってくる前は、その時にはマプーチェたちは、自分たちだけで楽しく暮らしておった、わしはそのように聞いておる。

それで、わしはいつも語る、このことをいつも語るんじやが、時にはな、悲しいような気持ちになるのだ、なんでわしらがこんなに苦められなければならないんだろう、とな。

Fei kuifi petu kompanolu tüfachi pu españole, fei ta iñchiñ ta iñ pu lonko yem, pu mapuche yem, ngenngefui ta tüfachi paí, tüfachi Chile. Kisui yengün, fei ayikawün felekefui ka kisu küdaukefui engün, kisu ngüneulekefui engün.

それで、昔まだこのスペイン人たちがこの地に入ってくる前は、我々のロンコ⁸たち、マプーチェたちがこの国の、このチリの主人だったのだ。彼らは自分たちだけで楽しく暮らし、自分たちで働き、自分たちの思うとおりに事を運んでいたのじゃよ。

Fei fantechi mu kai, fei konpalu tüfachi pu españole, fei ta müte kisu ngüneulewetulai reke ka fei weungepalu am ta iñ fütake che yem, fei ta, fei perdei ta iñ paí reke ta ti. Perdei ta iñ, ta iñ mapu yem, fei fantechi mu fei picheken medikanengetuiñ en ..., ngünenkanengeiñ reke pichiken mapu mu. Ka doi weyake mapu elukunuleleiñmu tüfachi pu, ta ti pu invasore ta ti, peñi.

だが、今では、このスペイン人たちがこの地に入ってきて来たんで、それまでのように自分の意志のままに生活することができなくなってな、それで我々の祖先が打倒されてしまうと、まるで我々の国を亡くしてしまったようなことになったのだ。我々の、我々の土地を失い、それで現在にいたる

まで、小さい土地に分かれさせられて、まるで騙されたような形でな、小さい土地に住まわされているのだ。で、わしらにより質の悪い土地しか残さなかったのだ、この、侵略者たちはのう、兄弟よ。

Entonce fei ta, kiñekentu ta fei pi historia mu ta tukui tüfeichi kimpapel-tulu, fei ta kisu yegün wiri pa'l favor de ellos müten. Fei iñchiñ mapuche ngen fei kümeke dungu tukupale engün. Fei kiñechi inche nütram am en un controversia tüfachi pu profesor de historia, de Chile sí, no? Entonces fei mu fei pieneu, fei pi, fei pi tüfeichi profesor de historia: “akulu tüfeichi pu español tüfachi Chile mu, pepai ta ngenokimche” pi ta ñi ngütram. “Pepai ta ‘salvaje’” pi ta ñi ngütram. Welu felelafui ta ti, peñi.

それでな、時に「歴史書」ってやつに、文書を書ける者たちが書いてきた、彼らが自分たちの都合のいいようにだけ書いてきたんじゃ。それで、われわれマプーチェとしてはな、彼らがもっと正しい事を書けばと思うのじゃが。そういうわけで、ある時わしは歴史の教師と、といってもチリの歴史の教師だがな、議論になったこともある。それでな、その時その歴史の教師はわしに言ったのだ、「スペイン人たちがこのチリに到来した時に遭遇したのは、理性に欠ける者たちだった。」と、そう言ったのだ。「野蛮な者」に遭遇した、と論じたのだ。だが、そんなことはなかったのだ、兄弟よ。

Fei mu ta iñche fei lladküngechi ta contestafñ: “Chem salvaje ta pepai?” pifiñ. Chile mu ta akui ta tüfachi pu español, pu español akui engün, kisu engün, pepai ta che tan igual como todo usteen pifiñ. También tenían, niefui ta püllü, niefui ta, tenían espíritu, tenían conocimiento, tenían amor, tenían cariño. Fueran salvaje, no tendrían cariño a su tierra, ni su familia, ni su, ni su ... o, o... o su, su oro, su mina, todo lo que tenían. Entonce kimchengen mu ta mapuche fei ta fentrepuñ, fenten tripantu ta inkafui ta ñi mapu engün ta ti.

それでな、わしは腹を立ててその者に反論したんだ。「一体どんな野蛮な者に遭遇したっていうんだね。チリにこのスペイン人たちがやって来た時、

スペイン人たちがやって来た時にな、彼らはあんた方皆と同じ人間に遭遇
しただけだろう。」とな。彼らにもあったのだ、魂だってあったし、精神も、
知識も、愛情も、やさしい気持ちだって持っていたのだ。もし野蛮人だっ
たのなら、自分の土地に対する愛情も、家族や、それから自分たちの…、
自分たちの金や鉱山その他、自分が持っていたあらゆるものに対する愛着
も持っていなかったはずだろう。だから、マプーチェたちが理性を備えた
者であったからこそ、こんなにも、こんなに長年にわたって自分たちの土
地を守ることができたのだ。

Fei ta kisu yengün kai ven... vengengepai tüfachi ta iñ mapuche yem, kisu
yengün ta preparaulekelafui ta ñi, ta iñ kewael engün. Sino que, claro, kisu
engün defendei ta ñi mapu ta iñ fütake che yem, fei ta witrami ta chi chiküm
rüngi, witrami ta wütrukurawe, ka witrami ta woleadora, ka witrami ta maza,
ka witrami ta lanza, y feichi chem mu ta ti, fei, kewai yengün mapuche ta ti.

それでな、彼らは敗れ…、我々の祖先は戦いに敗れたのだ、彼らは戦う
ための準備もできてはいなかった⁹からのう。ただ、もちろんな、彼らは土
地を守ったのだ、我々の祖先はな、鉄の穂先を取り付けた槍¹⁰を手にし、投
石器を手にし、ボレアドーラ¹¹を手にし、こん棒を手にし、そしてランサ
(槍)を手にしてな、それでそうしたものを使ってマプーチェは戦ったの
だ。

Fei doi küla pataka kechu mari tripantu, fei ta kewai ta iñ fütake che yem,
piukeyen mu ta ñi mapu ta ti, peñi. Piukeyen mu ta iñ mapu, iñchiñ ta tüfa
ta, y fantechi mu ta Chile pi ta mülei ta oro, mülei ta plata, mina de oro, mina
de plata, mülei ta grande riqueza pingetukei, iñchiñ ta iñ mandapafelen, ta
iñchiñ ta iñ ..., que nosotros eramos verdaderos dueños de to'o esta riqueza.

そうして、350年以上も我々の祖先は戦ったんじゃが、それは自分たちの
土地を心から愛していたからじゃ、兄弟よ。我々の土地を心から愛してい
たんで、我々はな、このチリには金もあれば、銀もある、金鉱山、銀鉱山
とか大きな富があるといわれているが、我々が主人だったのだ、我々のな
…、つまり我々がこうしたあらゆる富の本当の所有者だったのじゃ。

Entonces hoy en día que, poco menos que andamos mendigando. Pero esto para nosotros hoy en día, sentimos que es tan incorrecto. Y ... pero, si verdaderamente hubiera un buen pensamiento como Ngünechen ñi piel, piukeyewaimün y amawaimüm chumngechi piukeyewimi kisu ka femngechi piukeyewaimün, pin mülefui Ngünechen meu, fei ta feichi ngülam ngelai ta ti, peñi.

ところが今ではな、我々はほとんど施しを乞うような生活をしている。しかし、このことは我々にとって、今考えるとあまりにも不正なことだと感じるのだ。それで…、でもな、もし本当に「グネチェン様」¹²のお言葉のように正しい意識があれば、つまり互いに大事に思い愛し合うようにと、自分を大事に思うように互いのことを大切に思い合いなさいと「グネチェン様」は言われたのだが、ところがそうした意識などないのだ、兄弟よ。

Entonce, poulu küla mari kechu tripantu ñi kewan engün, fei tüfachi pu españole ta fei pi: “Chumngechi chi nütramkayafuiñ tüfachi pu lonko?” pi. Mülefui ta pu lonko ta feichi kewalu, mülefui ta ... acordapen nga ti kiñe lonko nga Mariluán pingefui, Mangín pingefui, Keupulikán pingefui, Galvarino pingefui, Lautaro pingefui tüfeichi pu lonko, fütake lonko yem ta ti, fütake guerrero yem inkapelu ta ñi mapu, entonces fei ula después kintungei, “Pacificación” pingei ta ti.

それでじゃ、戦いが始まってから35年¹³たった時にな、そのスペイン人たちは言ったのじゃ、「(敵の) ロンコたちに提案したらどうだろう」と言ったのだ。その頃は、その勇敢なロンコたちがおってな、思い出すのはあるロンコ、例えばマリルアンという、マギンという、ケウプリカンという、ガルバリーノという、ラウタロという、これらのロンコたち、偉大なロンコ、偉大な戦士だったんだが、自分たちの土地を守り抜いたのじゃ。それでな、のちに模索することになったのだ、「平定」¹⁴ってやつをな。

En esa “Pacificación” fei konpui lonko. Firmangefui un, ahí en, en ... me parece que en Collipulli, esa parte, fei firmangei, instalangei como un, como

un ..., como le dijera que kiñe ruka, como una mesa ahí, entonces fei mu fei citangei chi pu lonko fei, pu lonko puwi.

その「平定」にロンコたちは参加したのだ。その交渉で調印が行われたのじゃ、あそこ、あの、ええと…、多分コジプージのあたりだったと思うが、その地で調印が行われたのじゃ、ある、一つの…、何と言ったらいいかのう、家を、机みたいなものをそこに設置してな、そうしてそこにロンコたちは召集されたので、そこにロンコたちは到着したのだ。

Fei “peñi piwaiñ fantechi mu” piwi entre mapuche con española. “Peñi piwaiñ, kewawelaiñ, narwelayaiñ, y kiñe mu feleaiñ, y eimün fantepayai ta mün mandan, ka iñchiñ nga üyechi püle mandayaiñ.” pi engün ta ti.

そこで「これからは互いに兄弟と呼び合おう。」ってマプーチェとスペイン人の間で取り決めたのだ。「お互いに兄弟と呼び合い、もう戦うのはやめ、不信感を抱くのもやめて、双方が一つになって仲良くしよう。それであんた方が支配するのはここまで、それで我々はここから向こう側を支配することによようにしよう。」と言ったのだ。

Entonces, fei, después, deu dewi chi “Pacificación” mu, fei ta después quebrantangetui tüfeichi “Pacificación”. Quebrantangetui, respetalai pu española, entonces fei fantechi mu fei ta reweltuletuin ta ti.

それからな、その後、「平定」が成された後でな、その後でその「平定」は破られた。破棄されたのだ、スペイン人たちはそれを尊重しなかったのだな、それ以来今まで我々はただの傍観者のようになっているのだ。

Pero, de toa manera fantechi mu, peñi, fei ta, siempre fei ta iñchiñ weda rakiduamlaiñ, duamuiñ ta iñ kume feleal, duamuiñ ta iñ respetangeal müten como mapuche, y fei mu kai ta ti tüfa trawülmekeiñ, fei ka fantechi mu fei ta püramyemeketuñ ta iñ cultura. Chumngechi ta ñi nguillatukefel ta fütake che yem ta kuifi, chumngechi ta ñi kudekefel em, fei ta fantechi mu fachi-

antü trawüleñ, palín ta tüfa feichi kuden ta mülekefui tüfa antü mu, ante que llegaron lo pañole.

だがな、いずれにしても今まで、兄弟よ、いつも我々の方は不正な考えを持つことはなく、正しく振る舞うことを望んでおり、我々が望むのはただマプーチェとして尊重されることなのだ。そのために今でもこうして我々は集まってな、それで今まで我々の文化を高める¹⁵ように努めているのだ。昔、我々の先祖たちが祈願の儀礼を行っていたように、そして遊戯を実践していたように、今まで、今日われわれもこうして集まったのだ。これはパリンとってな、その遊戯は行われていたんじゃ、これは昔から、スペイン人がやって来るよりも以前からな。

Entonces hoy en día fei ta, eimi ka mülepaimi tüfa, peñi, welu ta, y gracias, peñi, fei ta kimukeimi ta ti, ka mülepaimi iñchiñ ta ñi mapu mu ta ti. Tüfa ta tierra mapuche ta ti. Tierra Araucanía pin mülei ta tüfachi mapu meu.

それで、今日はな、あんたがこうしてここに来ておる、兄弟よ。だがな、それで、ありがとう、兄弟よ、あんたはわしらの事を学びつつあり、そして我々の土地に来てくれている。ここはマプーチェの地なのだ。この地のことを「アラウカニーアの地」というんだ。

Entonces fei ta mañumayu, fei ta quiera Ngünechen, y mongeleaimi kai, peñi, fei ta, fei puedelmi ngütramyeael tüfachi dungu, fei ta ngütram piafimi. Fentekunuan ñi ngütram, peñi.

そういうわけで、あんたに感謝したい。グネチェン様の思し召しでな、それであんたが元気であるように願おう、兄弟よ。それで、もしあんたがこの事を話すことが出来るのなら、話して欲しい。わしの話はここまでとしよう、兄弟よ。

<注>

1. 「パリン palín」 スペイン人の到来以前からマプーチェたちが実践してきたホッケ

ーに似た遊戯。植民地時代から19世紀に至るまで、単なるスポーツの域を超え、様々な政治・軍事的機能を果たしてきた。また、伝統的にシャーマンであるマチが参加することによって、半ば宗教的な色彩も備えていた。「パリン」が歴史的に果たしてきた役割については、千葉（1997年、218-221頁）参照

2. 「バハイ教」は19世紀にイラン人のバハウラが創始した宗派で、戦争の否定と人類の協調を説く。チリ南部ではラブランサに本拠を置き、マプーチェ語ラジオ放送を通じて布教活動を行うことによって、今日南部農村地域に住むマプーチェたちの間に大きな影響を与えるに至っている。

3. 独立戦争期のマプーチェの動向については、B. Vicuña Mackenna (1972)、Tomás Guevara (1911)を参照。

4. 「平定」の最高責任者であったコルネリオ・サアベドラ大佐が、1861年10月11日付けで軍事省の国務大臣に提出した計画書には、すでに、マジェーコ川を当面の新しいフロンティアとして複数の要塞で固めた後、2～3年後にはさらに南進することによってマプーチェ居住領域全体を占領するという計画が記されている [Saavedra: 10-14]。

5. 今世紀の初頭には、少数ながらマプーチェ自身のマプーチェ語による証言が記録され、出版されている。

その主なものの一つは、19世紀後半の平定戦争前後の時期の出来事に関する地区レベルの伝承をトマス・ゲバラが編纂した「最後のアラウカーノス一族たちとアラウカーノスの習慣（1913年）」である。タイトルからわかるように、ゲバラはマプーチェ社会が間もなく消滅することを予想して同証言集を編纂したのである。そしてもう一つは、海岸部ブディ地区のカシーケであったパスクアル・コーニャが語った証言を、カプチーノ修道会の、デ・メュースパッハ神父が編纂した「あるマプーチェのカシーケの証言（1930年初版）」である。

これらは、平定後の比較的早い時期に記録されたマプーチェ自身の証言という意味で極めて貴重な資料である。だがもちろん、これらの記録によってあらゆる地域マプーチェの、あるいは、全ての歴史的事実に関する彼らの認識が語り尽くされているわけではない。

なお、マプーチェの歴史や文化を研究する研究者の大半が、これらの資料を参考にする際に、原マプーチェ語から直接引用を行うのではなく、様々な意味で原文との内容の不一致という問題をかかえた「スペイン語対訳」の方を鵜呑みにする形で行っている。つまり、せっかくの貴重な資料を、その価値を半減させるような形で利用しているのである。

6. マプーチェ男性同士の間で用いられる呼称「ペニ peñi」は、本来男性が男性の兄弟に関して用いる親族名称である。

7. 「ウインカ winka」広義には「よそ者」だが、現代のマプーチェの間でのより具体的な意味は「ヨーロッパ系の一般チリ人」である。

8. 「ロンコ lonko」マプーチェの地区レベルの首長を指す名詞。「頭」という意味にもなる。

9. 「戦闘の準備が出来ていなかった」というのは、スペイン人征服者やチリ軍が用いた火器の使用に言及していると思われる。つまり、武器の側面でマプーチェが不利な状況に置かれていたということを指摘しているのだろう。

10. 「鉄の穂先を取り付けた槍」マプーチェの間では、もともと鉄の使用は知られていなかったが、スペイン人に対抗して行く過程で、彼らは積極的に征服者軍の鉄器を導入し、

これを槍に取り付けて強力な槍隊を結成するようになった。マプーチェによる軍事面での鉄器の導入については、千葉（1998年、41-53頁）参照。

11. 「ボレアドーラ」とは、もともと今日のアルゼンチンのパンパ平原部に居住していた先住民族が狩猟用に使用していた武器だが、すでに18世紀にフランシスコ会のソルス神父が著した記録には、チリ側のマプーチェがこの武器（マプーチェ語で“laque”と表現されている）を使用していたことを示す叙述が見られる [Sors: 182]。

12. 「グネチェン様 Ngünechen」マプーチェ語で「人間を操る存在」の意。今日マプーチェにとっての最高の民族神と考えられている。この概念が記録に現れるのは今世紀初頭以降であり、「平定」以降安定的に行われるようになったキリスト教の布教活動の結果マプーチェたちにも浸透したものと考えられる。

13. 前々段落の内容から、「350年」の誤りと判断される。

14. フアンは「平定 *Pacificación*」というスペイン語の名詞を、「チリ共和国軍によるマプーチェ居住領域の制圧」という本来の意味ではなく、同語源だが異義語である「和平 *paz*」の意味で用いている。こうした用法はフアンだけではなく、ラウタロ地区の他の共同体に住むあるマプーチェ証言者からも耳にした。「和平」を約束しておきながらそれを破棄した、という「チリ人による裏切り」という強い含蓄が、この言葉に関する彼らの認識には込められている。

15. この文脈から明らかなように、「自分たちマプーチェの文化を高める」という表現は、マプーチェの伝統的な習慣や儀礼を純粋に保持すること、あるいは「外部者」の影響を受容してしまった場合には、そうした「異文化の要素」を除去すること、という意味で使われている。「スペイン人到来以前のマプーチェ社会」を「黄金時代」ととらえ、そうした状況に「回帰するように努力すること」と言い換えることもできるだろう。

<参考資料>

1. 音声資料 (MD録音)

Conejero Carilaf, Juan, Comunidad de José Angel Lepoique, Comuna de Lautaro, Novena Región, Chile, 7 de septiembre de 1996.

2. 文献資料

千葉泉、「マチと夢と銀細工—チリ先住民伝統医療師の現状—」、『大阪外国語大学論集』第17号所載、1997年、203-230頁。

千葉泉、『馬に乗ったマプーチェの神々—チリ先住民文化の変遷—』、大阪外国語大学学術研究双書19号、1998年。

Coña, Pascual, *Testimonio de un cacique mapuche*, Pehuén Editores, Santiago, 1984, 3^{ra} edición.

Guevara, Tomás, “Los Araucanos en la revolución de la Independencia”, en *Anales de la Universidad*, Imprenta Cervantes, 1911, pp.217-641.

Guevara, Tomás, *Las últimas familias araucanas i costumbres araucanas*, Santiago de

Chile, Imprenta Litografía i Encuadernación "Barcelona", 1913.

Mackenna, Benjamín Vicuña, *Guerra a muerte*, Editorial Francisco de Aguirre, Buenos Aires, 1972, 3^{ra} edición.

Saavedra, Cornelio, "Consideraciones a favor del avance de nuestras fronteras en el territorio indígena, i del establecimiento de una nueva línea sobre el río Malleco", en *Documentos Relativos a la Ocupación de Arauco*, Imprenta de la Libertad, Santiago, 1870, pp.6-22.

Sors, Antonio, "Historia del Reino de Chile, situado en la América Meridional", en *Revista Chilena de Historia y Geografía*, Año XI, Tomo XXXIX, 1921, Núm.43, pp.163-199.

Villalobos, Sergio, "Tres siglos y medio de vida fronteriza", en Villalobos, Sergio y otros, *Relaciones fronterizas en Araucanía*, Ediciones Pontificia Universidad Católica de Chile, Santiago de Chile, 1982, pp.9-64.